

Ten Tenors, Ten Colors ~ venus great tenor sax players 10

十人十色 ~ ヴィナス・グレート・10テナーズ

- エリック・アレキサンダー “ モナリサ ” Eric Alexander " Mona Lisa " 〈 R. Evans 〉 (7 : 42)
- スコット・ハミルトン “ アローン・トゥゲザー ” Scott Hamilton " Alone Together " 〈 A. Schwartz 〉 (7 : 03)
- ケン・ペプロフスキー “ プア・パタフライ ” Ken Peplowski " Poor Butterfly " 〈 R. Hubbell 〉 (6 : 26)
- ボブ・キンドレッド “ タブー ” Bob Kindred " Taboo " 〈 M. Lecuona 〉 (4 : 44)
- カーメン・レギオ “ マイ・ファニー・バレンタイン ” Carmen Leggio " My Funny Valentine " 〈 R. Rodgers 〉 (8 : 14)
- ジョージ・ガゾーン “ ナイト・オブ・マイ・ピラド ” George Garzone " Night Of My Beloved " 〈 D. Duran 〉 (6 : 05)
- バルネ・ウィラン “ ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ ” Barney Wilen " You'd Be So Nice To Come Home To " 〈 C. Porter 〉 (5 : 45)
- エディ・ハリス “ ジョージア・オン・マイ・マインド ” Eddie Harris " Georgia On My Mind " 〈 H. Carmichael 〉 (6 : 21)
- アーチャー・シェップ “ さよならを言うたびに ” Archie Shepp " Everytime We Say Goodbye " 〈 C. Porter 〉 (7 : 43)
- ファラオ・サンダース “ グレイテスト・ラブ・オブ・オール ” Pharoah Sanders " Greatest Love Of All " 〈 M. Masser 〉 (6 : 26)

監修：寺島靖国

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*
Supervising Editor : Yasukuni Terashima
Produced by Tetsuo Hara
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound.
Front Cover : The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo
Designed by Taz

エリック・アレキサンダー、スコット・ハミルトン、ケン・ペプロフスキー、ジョージ・ガゾーン、カーメン・レギオ、ジョー・ジャクソン、アーチャー・シェップ、バルネ・ウィラン、ファラオ・サンダース、エディ・ハリス

全版の中に「ブライト・モーメント」という曲が入っています。これ、ローランド・カークの曲なんです、実に哀しみがほのぼのとしていていい。これと「プア・パタフライ」とどちらにするかずいぶん迷いました。比べてみると「プア・パタフライ」のほうがさりげない。自然にずっと気持ちの中に入ってきて消化がいいのです。これ、名演の条件の一つではないかと思ったわけです。さらに出だしのワン・センテンスでこれくらいグッとくる演奏もそうざらにあるものではありません。エリック・アレキサンダーが初めて日本に来て「ザ・マン・ウィズ・ア・ホーン」を吹きました。それを思い出しました。

最新盤のボブ・キンドレッド『ボレロとブルースの夜』。これ、私、滅茶苦茶好きです。最近のヴィナスの一押しCDです。まず、タイトルがいいやね。ボレロは私になにか特別の感情を呼び起こします。この優雅な南国のリズム、あなたもぜひ好きになってください。優雅な気分になること請け合いです。CDの帯にミステリアスでセクシーとあります。なるほど。ボブ・キンドレッドはかなりのお歳のテナー・マンですが、それにしては高齢者のミュージシャンによくある衰え的なものを一切感じさせません。そこがまず凄い。私は少しでも劣化が聴こえたらそこで聴取を中止します。だって聴いていてハラハラするなんて損しちゃいますものね。ますますの元気と、それから先ほどお話しした自信、この二つの要味がプラスされてお聴きのような実に聴き応えのあるテナー吹奏が実現しました。いやこの山あり谷あり、大波と小波、その連続プレイにはただもうため息が出るばかりです。原さん、いいテナーを見つけてくれました。曲でいうと7曲目に「ラ・コンパルサ」が入っています。これ、今回の『ピアノ・トリオ10人10色』で私が最初の1曲目に紹介した曲です。ピアニストはジョン・ディ・マルティーノですが、ここでもサイドメンとして彼が参入しています。大好きな曲で2種類聴けて得をさせていただきましたが、それぞれアプローチという演奏の気分が違うんですね。こちらのほうが優しい気持ちで弾いています。ピアノを愛撫している感じです。バックのドラムとベースがもう最高。これは名演です。あと5曲目の「ブラック・エンジェル」。実は「タブー」とど

ちらにするかけっこう長く考えました。短期的には「タブー」、長期的には「ブラック・エンジェル」。しかしこのくずれかかったムードは一体、なんなのだ。ボブ・キンドレッド、実にいい味出しています。

カーメン・レギオのテナー。この人のよさは究極の自然体です。その意味ではズート・シムズに似ていますが、ズートはエネルギーシユな自然体で、カーメン・レギオはエネルギーを抜いて得た自然体。私にはそんなふう感じられるのですが。「マイ・ファニー・バレンタイン」を聴いてください。この曲をズート・シムズが吹くともう少し力んだ感じが出るでしょう。カーメン・レギオは流れに身をまかせるようにして吹きます。そのあたりがこの人の勤どころですね。日本ではほとんどその名が知られておりません。林の中を一陣の風が吹き抜けるような「マイ・ファニー・バレンタイン」。この曲の知られざる名演に加えたいと思います。

ジョージ・ガゾーンもまたカーメン・レギオ同様、特にここでは植物性のテナー・マンとしてとらえられている。このあと動物性の人たちが続いて出ますので、CDの中間部でちょっと一休み。しかし驚きましたね。ジョージ・ガゾーンがこんなふうなやさ男型のテナー・マンだったとは。いや、こういうことも出来る人、ということでしょう。強くも吹ければ、やさしくも吹ける。そういう才能もあっていいのです。曲では「愛の語らい」と「ナイト・オブ・マイ・ピラド」が競り合いました。将来的にどちらを長く聴き続けるかな。それを考えた時、「ナイト・オブ・マイ・ピラド」が一歩前に出たのです。この曲を聴いていると頭の中からすべてが消えてゆくような気がします。空になった頭の中のなんと気持ちのいいことよ。人の頭っていつもなにかで一杯ですからね。私なんか手をつ込んで全部取り出してそのへんにぶちまけたらどんな気持ちいいだろうと。そんなことをしなくてもちゃんと「ナイト・オブ・マイ・ピラド」があるじゃないか、ということですね。

バラードが続きました。少し気分を変えましょう。いくらバラードが最高といってもね。バルネ・ウィランです。この人は速い曲を吹いてもバラードに聴こえます。歌の心を忘れないのです。亡くなる少し前、ブルーノート東京へバルネを觀に行きました。控え室へ行きますと、見るからに大儀そうでくつたりの限界という感じてした。サインをもらいました。むっくり起き上がってサラサラサラと。演奏はしかしたぎり立つような熱のこもったものでした。その時の熱演を思い出させるような「帰ってくれば嬉しいわ」。アレンジが効いていますね。アレンジといえば『ニューヨーク・ロマンス』での次の曲「マック・ザ・ナイフ」を超スローで吹く編曲。完ぺきなまでのアレンジ演奏ですが、しかし少しも嫌みがない。大したものです。曲に熟達しているからでしょう。曲あしらいの名人。この人の前ではこんな難曲も赤子同然ということです。

テナー・サクスをアルト・サクスのつもりで吹いているのではないが。エディ・ハリスのテナーの印象は昔から私にとってこういうものです。低音も駆使するけれど高音域にも激しく踏み込む。原CD『フリーダム・ジャズ・ダンス』では「星降るアラバマ」や「フォー・オール・ウィ・ノウ」といった私好みのスタンダードを演っていますがやっぱり「ジョージア・オン・マイ・マインド」がよかった。テナー・サクスの低く美味しいところから出発してゆきます。ソロの途中で得意の高域吹奏になりますが、前述したようにこのメリハリ感がたまりません。ジャッキー・テラソンのピアノ・ソロに注目してください。このソロ、凄いですよ。こんな遠いつくばるような心境を吐露する人なんですね。後半が特に名演です。いや、いい。

アーチャー・シェップは私が苦手とするところの人です。1960～70年代のフリー・ジャズが盛んだった頃、シェップはその親玉のような人でした。怖い人でした。しかしこの「さようならを言うたび」は怖くない。むしろやさしい。そばに寄って話しかけたくなります。こういうシェップなら断然好きです。しかしなぜあの頃はあのように荒れ狂ったテナーを吹いたんだろう。やはり時代を意識したんだと思いますね。ミュージシャンだって生活を立てなければいけない。仕事が欲しいんですよ。大変です。

ファラオ・サンダースだって立場そして状況は同じです。シェップと並んでフリー・ジャズの先頭に立った一人でした。今は、きっとすがすがしい気持ちでいるんでしょう。激動のあの頃を思い出して懐かしんでいるような演奏です。「グレイテスト・ラブ・オブ・オール」。ロッキング・チェアのような味わいの一曲です。いい晩年をお過ごしですね、と言いたいです。

寺島靖国

今日の文は「ですます調」でゆきます。やさしい気分なのです。なぜやさしい気持ちなのかというと、そりゃあなた、決まっているではありませんか。テナー・サクスのバラードをたっぷり聴けばそういう気分になるのは当たり前のことでしょう。まさしく人生の中には「テナー・サクス・バラード効果」というのがありまして、それを享受できるジャズ・ファンは幸せな人種であるはず、と一人エツにいつているわけなんです。

私はジャズと同様にオーディオが大好きです。で、大きいスピーカーのシステムと小さいのと一つの部屋に二つ設置しているんですね。ぜいたくだなあ、ですって？ まあ私も相当の歳ですからそのくらいいはかんべんしてください。ピアノ・トリオを大きいほうで聴き、テナー・サクスを小さいほうで聴くんですね。これは私の私的な極意なのです。私の場合、ピアノ・トリオを雄大に聴き、テナーのバラードをこぢんまりと聴くのが趣味なんです。理由ははっきりしませんが、性に合っています。貧乏性とは関係なさそうですが。小さいスピーカーからエリック・アレキサンダーが身乗り出すようにして現れてくると、私はもう「いいなあ。たまらないなあ。幸せだよなあ」という気分になってしまいます。これはもう理屈でもなんでもない。ジャズ・ファンのごく自然な感情でしょう。まして曲が「モナリザ」とくれば。以前もどこかで書きましたが、エリックといえばバラード、バラードといえばエリックなんです。エリックとの付き合いは10年くらいになりますが、長い間聴いているとその人の本質のようなものがなんとなく分かってきます。エリックは、バラード吹きなんです。もっともエリックはこのことを承服しているとはいえません。あなたがそう思うのならそれでいいではないか、とまあこんなラフな受け取り方です。バラードがジャズの華だということにまだ氣付いていないのです。まだまだ若いし、ちから余っています。急速テンポの曲をビュンビュン飛ばしたい。ちからの限りを尽くしてみたい。まあ、そんな気持ちでいるんでしょう。バラードは二の次だと。しかし二の次でこれだけ吹いてしまうんですから凄いものです。先が思いやられますよ。50歳を過ぎたらどんなバラードをやらかすのやら。空恐ろしいです。他にもバラードの得意なテナー・マンが少なくありません。しかし、そうした老練のテナー・マンの中でエリックはとにかく活きがいいんです。それにモダンな感覚で歌えるという意味ではピカーではないでしょうか。それに楽器をパーフェクトに自分のものにしている。皆さん、いま、お聴きの通りです。いつだったか、楽器をコントロールした時に音楽に対する自信が芽ばえたと言っていました。バラードは吹奏が簡単に思えたりもしますが、自信に裏打ちされないバラードなど聴けたものではありません。

スコット・ハミルトンの「アローン・トゥゲザー」もいつも手許に置いて聴きたい常備品です。私、なにしろ「アローン・トゥゲザー」という曲が大好物なのです。一日一回聴かないと駄目。朝起きて一回、寝る前に一回が理想的です。大抵はピアノ・トリオですが、あとはやはりテナー・サクスのワン・ホーン。これに限りますね。曲や演奏の他に耳をすますのは音です。一体にスロー・バラードのテナー・サクスの魅力は低く荒地の地面を這うような音にあるんですね。他の楽器では聴けない音です。よくサブ・トーンなどと言ったりしますが、テクニカルなタームでは言い表せない至福の境地。少しばっちいですけどツバキがしたたり落ちるような、ジャズ的なダーティな世界です。そのあたりの境地の音作りはヴィナスがうまいものです。いろんなCDの中にツルンとした音作りのCDもたくさん見かけますけど、やはりジャズのテナー・バラードはいい意味でささくれ立っていないければいけない。子供の頃よくお父さんのアゴをなでさせられましたね。お父さんは喜び、子供は迷惑がり。私は1歳半のマゴによくやりますけど彼、嫌がって泣き出します。ケン・ペプロウスキーは、ヒゲの濃度が低いです。荒地ではなく砂地を這うような音。ソフトです。ペプロフスキーはクラリネットとテナーを同等に吹く人で、このことと関係があるんでしょうか。まるやかな音色のクラリネットが彼の身上です。きっと人格の円い人なんでしょうね。そういえばケン・ペプロフスキーが日本で表立って紹介されるのは初めてではないでしょうか。彼を知っているジャズ・ファンは相当マニアックな人でしょう。ヴィナスの原さんも知らなかった。しかしどなたかの伴奏で聴いて、これは凄いと。自分が気に入れば知られてようが知られてまいが構わずCDを作ってしまう。そういう冒険的かつチャレンジラスな人が原さんという人です。大抵のレコード会社のプロデューサーは尻込みするでしょう。私はヴィナスというレーベルの魅力の第一はその断固率先発売性にあると思うのです。ケン・ペプロフスキーのようなミュージシャンが愛される社会が健全なジャズ社会ではないでしょうか。私に言わせれば、これまでが少しイビツだったんですよ。『メモリーズ・オブ・ユー』完